Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-31

ピーター・L・バーガー研究――社会学、宗教、保守主義――

池田，直樹

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2021-03-25
(Date of Publication)
2024-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7959号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007959

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式３）

論　文　要　旨

氏　名　池田　直樹
専　攻　グローバル文化
指導教員氏名　松家　理恵

論文題目（外国語の場合は日本語訳を併記すること）

ピーター・L・バーガー研究――社会学、宗教、保守主義――

論文要旨

本稿の目的はピーター・L・バーガーの知的なバイオグラフィーを描き出し、現時点におけるその評価を定めておくことである。それに際して本稿は、バーガーの神学的議論や政治的立場にも目を配りつつ、彼の社会学思想を総体的に把握しようと努めることになる。そのためにまず本稿の前半部では、初発の時点でのバーガーの思索における社会学的関心と宗教的関心の両方の存在を確認すると共に、彼がそれらをいかにして調停するようになったのかということを明らかにする。これによって、なぜ彼の関心がある時期に具体的な現代社会論の方向へと転換することになったのかということの理由も明示されるはずである。次いで後半部ではその現代社会論を考察すると共に、そのような問題への取り組みの中でバーガーがいかにしてそれまでの理論的枠組みを部分的に修正しつつ再構成するようになったのか、またその結果として、彼がいかなる社会構想を練り上げるに至ったのかを解き明かす。そのための各章の概要は次の通りである。

第１章はバーガーの学問的営為の出発点にあたる1950年代の議論を取り上げる。主たる考察対象となるのは、1954年にニュー・スクール・フォア・ソーシャル・リサーチに提出された彼の博士論文と、その後のドイツでの調査を基にして著された論考である。先述の通り、何よりもバーガーにおける社会学的関心と宗教的関心の二重性を確認することがここでの目的となる。

第２章の主題は彼の主著と目される作品、『リアリティの社会的構成』に至るまでの理論的発展の過程である。第２章はそれについての考察を通じて、前章で確認されたバーガーの議論がどのようにしてその後の理論へと社会学的に洗練されていったのかということを明らかにする。そこでは、上掲書の完成に至る過程において、それ以前の彼の宗教的なターミノロジーが徐々にそぎ落とされていった様子が描かれることになるだろう。

第３章は、上述の、バーガーにおける宗教的関心の一見するところの後景化の理由を解き明かし、その上で、1960年代に登場してきたラディカル社会学に対するバーガーの批判とその神学的根拠についての考察を通して、彼の社会学的議論とキリスト教信仰との関係を解明する。これによって、第１章で確認された彼の関心の二重性が責任倫理に寄与する価値自由な社会学への専心という形で調停されるようになったこと、そしてそれと共に、彼が責任倫理に則った現世改革の試みとして現代社会論を展開するようになったことが明らかになる。また第３章においては、最後に、この転回を経た後のバーガーが第１世代のネオコンの立場に接近していたことが確認される。以上の議論は必然的に、次章以降の後半部の議論の導入となる。

第４章は1970年代のバーガーのアメリカ社会論を取り上げる。そこでの中心的な主題は正当化の危機という事態である。これは、『リアリティの社会的構成』で理論的に描出された社会的世界の現実的な成立可能性に関わる最初の議論であった。この問題に関して、この時期のバーガーはキリスト教の教会に格別の期待をかけていた。

第５章は1970年代から80年代にかけてのバーガーの資本主義擁護論と、同時期の彼の対話相手の１人であったM・ノヴァクの同種の議論とを対比する。バーガーにとって、正当化の危機論に並んで、資本主義論もアメリカ社会の意味に関わる重要なものであった。資本主義やアメリカ社会の宗教的な正当化というノヴァクの議論と、それに対するバーガーの醒めた態度の中に、その後の90年代に訪れるバーガーとネオコンとの決裂に至る伏線を見出しておくことがこの章の目的である。

第６章は今述べた決裂を迎えるまでの消息を、主にR・J・ニューハウスとの関係に即してたどっていく。一般にこの決裂は、ニューハウスやノヴァクが「神政保守（theocon）」の方向へと舵を切ったことが直接的な原因と見なされている。しかし本稿は、彼らの関係の断絶にはより深い対立の源泉があったということ、すなわちバーガーの批判は何よりもまずニューハウスたちのラディカル化の傾向に向けられていたことを論証する。

第７章は「文化戦争」という状況を前にして構想された、バーガーの規範的な社会像を明らかにする。ハンターの提起した文化戦争論は、分極化するアメリカの様子を克明に描き出すものであると共に、それまでのバーガーの現代社会論に対する鋭い批判を含むものであった。これを受けてバーガーは、1970年代の議論の根本的な修正を余儀なくされることになる。また、その改訂の作業はこれまでに見てきた議論の最終的な総合の試みでもあった。彼はそこで、多元主義がニヒリスティックな相対主義や暴力的な闘争に陥るのを防ぐべく、人格の価値と自由――人間の尊厳――を理念的な核とした社会とその制度的秩序を構想するに至る。ここにおいてわれわれは、漸く彼の社会学思想の到達点にたどり着くはずである。

それに続く最後の結びの部分では、本稿のバーガー論が今後どのような論題へ開かれていくのかということについての現時点での展望を素描する。そこにおいては、バーガーとリベラル思想との関係、バーガーと保守主義思想との関係、ならびにバーガーの社会学思想の発展的継承の形といった論点が今後の課題として示唆されることになる。それによって、本稿において語られたバーガー論が、今後いかなる形においてアメリカ社会学思想史研究に寄与しうるのかということが朧気ながらも描かれるはずである。

【課程博士用】

論文審査の結果の要旨

氏　　名	池田　直樹		
論 文 題 目	ピーター・L・バーガー研究――社会学、宗教、保守主義――		
判　　定	合　格　・　不 合 格		
論文チェックソフトによる確　認	☑ 確認 ☐ 未確認　理由：		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	委 員 長	教授	上野　成利
	委　　員	教授	松家　理恵
	委　　員	教授	市田　良彦
	委　　員	准教授	井上　弘貴
	委　　員	神戸大学名誉教授	廳　茂
要　　旨			
別紙のとおり			

■本論文は、アメリカの社会学者ピーター.L.バーガー（1929―2017）の社会学説と規範的な社会構想の展開を、1950年代の最初期から21世紀初頭の最晩年にいたるまで詳細に跡づけた、きわめて大部の作品である。日本ではバーガーの1960年代後半の著作『リアリティの社会的構成』がよく知られており、社会に批判的なラディカル社会学の典型として、そしていわゆる「社会構成主義」の定礎者として一時おおいにもてはやされた。その後、バーガーの新保守主義への転換が知られるようになると、日本におけるバーガー熱は急速に冷めてしまうが、しかしアメリカではバーガーはその後も一貫して社会学界の中心人物の一人として影響力の大きい存在でありつづけた。この人物の半世紀にわたる知的営為を総括する作業は、本人による自伝の出版も含めて徐々に進捗しつつある。とはいえ、多様な局面をもった彼の思想の全体像を把握するという課題は、いまだ途上の段階にあるといわざるをえない。こうしたなかで本論文は、篤信のルター派の宗教的信仰者としてのバーガーに光を当て、ラディカリストから新保守主義者へと転ずるという従来のバーガー像の刷新を試みる。バーガーにおける信仰と学問、実践と認識の不可分の統一に着眼し、独自の社会学の樹立と社会理想の構築に向けて時代と執拗に格闘しつづけたバーガーの一貫した思想像を描き出すこと、ここに本論文の眼目がある。

■本論文は全７章からなる。前半（第１章～第３章）では1950～60年代におけるバーガーの宗教的関心と社会学的関心の所在が確認され、その社会学理論の形成と特徴が解明される。後半（第４章～第７章）では、1970年代以降の現代社会論の展開とその到達点が解明される。

第１章　端緒――二重性の力学

従来のバーガー論はすべて1960年代から始まるが、本章では1950年代のイスラム教の一派バハーイー教を主題とした彼の博士論文と、同時期におけるドイツの教会活動の参与観察的リサーチが検討される（これらの資料を本格的に取り上げた先行研究はアメリカにも存在せず、本論文の特筆すべき業績の一つといえる）。これによって、第一に信仰者として自らを規定しながら、なおかつ社会を現実主義的に問うという、バーガーの原問題が描き出される。

第２章　形成――『リアリティの社会的構成』

1960年代において世界の大学で最も広く社会学の理論的テキストとして使われ、その後の「社会構成主義」に多大な影響を与えた『リアリティの社会的構成』の形成過程とその影響が論述される。彼がいかなる事情で自らを社会学者として規定することになり、それによって独自の社会学理論の樹立に向かう必要があったのかという観点から、50年代の宗教的関心と社会学的関心が60年代に社会学理論へと収斂されていく過程がここでは考察される。

第３章　礎石――バーガー社会学のメタ科学的前提

50年代にすでに萌芽的に意識され、60年代の社会学理論の形成過程において確固たる信念へと成長していく、バーガーの社会学のメタ科学的前提が検討される。M.ウェーバーとの対峙から提唱された価値自由論と責任倫理論がそれである。その責任倫理論は人間の不完全性の認知と隣人愛を要請し、だからこそ価値自由な学問を肯定するものであった。本章の分析によれば、こうした思想には当時のラディカル社会学に対抗するという含意もあり、同時にこれが70年代以降にアメリカ社会論の考察へ彼を向かわせる契機となったとされる。

第４章　転回――正当化の危機論

本章では1970年代のバーガーのアメリカ社会論が検討の俎上に載せられる。バーガーは責

任倫理論のもと、アメリカ社会のあるべき形態の考察に取り組み、社会の構成をめぐる理論構想を応用し、現実の社会の具体的な構成のありかた、さらには理想的な構成のありかたを問う。バーガーが取り組んだのは、アメリカ社会における正統性の危機とその正当性を支えていた中間集団の機能の低下という主題であった。本章ではこの論点について考察される。

第5章　齟齬——資本主義擁護論

70年代から80年代にかけてバーガーは、資本主義を擁護する新保守主義の論客として活動する。しかし彼は穏健な民主主義者でもあり、新保守主義とも完全に同調できないことを自覚しはじめる。バーガーと新保守主義は、80年代に最も親密となり90年代に破綻するというのが通常の了解だが、それにたいして本論文は両者の関係の破綻はすでに80年代に萌していたという立場をとる。本章では新保守主義の主導者の一人でもある友人M.ノヴァクの資本主義論（アメリカ社会の宗教的正当化）との対比をつうじて、その経緯が描き出される。

第6章　決裂——政治と宗教の問題再考

90年代にバーガーと新保守主義との決裂は決定的となる。本章ではその経緯と理由について、これまでバーガー研究でほとんど取り上げられたことのない、バーガーの関与した宗教的宣言「ウィリアムズバーグ憲章」を手がかりとして解明される。議論の中心となるのは、この憲章の主導者の一人でもあった新保守主義者R.J.ニューハウスのキリスト教的道徳擁護論にたいするバーガーの批判的な姿勢である。本論文によれば、バーガーはキリスト教的道徳観の支持者ではあったが、それをそのまま政治領域に持ち込む立場には反対であった。

第7章　終局——〈間〉の模索

90年代にバーガーは社会学者J D.ハンターの提起する「文化戦争」論への対応が不可避となる。バーガーはアメリカ社会の分断に対処すべく、アメリカ社会における中間集団の様態を仔細に検討しつつ、肯定的なポテンシャルをそこに探ろうとする。彼は人間の尊厳の理念と自他の相互的承認を基盤としつつ、国家・市場・市民社会の相互抑制と均衡を目指す「平和の公式」論を展開する。本論文はそこにバーガーの規範的な社会構想の到達点を確認する。

■本論文は、半世紀にわたってアメリカ社会学の中心人物の一人でありつづけたバーガーの社会学説と社会理想にかんする（アメリカにおける研究も含めて）最も包括的な研究である。50年代の博士論文期におけるバーガーの出発点を明らかにしたこと、そこに示された学問と実践に対する宗教的な関心のありようを確認し、信仰者バーガーと社会学者バーガーの結節項となる価値自由論と責任倫理論を解明したことによって、本論文は、前期から後期へと大きく変節したかに見えるバーガーのきわめて一貫した知的バイオグラフィーを構成することに成功している。社会学の学説研究と現代社会論、アメリカ社会学史と政治思想史、これらの非常に密接な関係を例証する優れたモノグラフともなっている。文体も流れのスムーズなものであり、筆力も評価に値する。アメリカ社会学の全体的な布置の把握、そのなかでのバーガーの位置づけなど、なおも仔細に詰めるべき課題が残されてはいるが、現時点で質量ともに本論文に比肩するバーガー研究はほかになく、すでに高い学術的価値を有していると評価できる。

以上の観点から本審査委員会は、学位申請者の池田直樹氏に博士（学術）の学位を得る資格があると認定する（なお、申請者は他に査読付き論文4編を公刊していることを付言しておく）。